

[044]中国文学論集表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1650634>

出版情報：中国文学論集. 44, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

編集後記

会員の皆さま、ここに『中国文学論集』第四十四号をお届け致します。本号は、昨年十二月二十六日に永眠された岡村繁先生の追悼号となりました。本号では、岡村繁先生のご長男である岡村穰様をはじめ、先生に縁のある方々より六篇の追悼文をお寄せ頂き、また八篇の学術論文を掲載することができました。

光陰矢の如し―突然の訃報から、早くも一年が経とうとしております。岡村繁先生という九州大学中国文学研究室の偉大な指導者を失い、残された我々は岡村先生のご遺志に少しでも報いるべく、微力を尽くして参りました。本号掲載の竹村先生の追悼文にもその詳細が記されておりますが、明治書院にて刊行中の『白氏文集』の訳注事業の継承のほか、先生のご遺志に従い、その膨大なご蔵書を先生自ら文学部の設立に尽力された久留米大学に「岡村文庫」として寄贈するため、今年の三月から四月にかけて、研究室の院生・研究員諸氏によって、青葉のご自宅へと赴き、蔵書整理と目録作成を行いました。そして、のべ約二万冊にも及ぶ先生のご蔵書は、七月末に、無事久留米大学へと搬送されました。

私自身は二〇〇三年に研究室に進学して以後、岡村先生に直接お目に掛かったことは数回しかありませんでしたが、平素よりそのご著書を通じて、様々なことを学ばせていただいております。学界の通説や定説に安易に従わず、自分自身の目と判断によって、誰もが疑わない根本的な部分にこそ批判的考察を加え、新たな説を提示してゆく。ものごとの根源を問い直すという先生の学問の姿勢は、研究室における教育や研究活動の重要な部分として、いまでも我々後学に確かに受け継がれています。またこのたび、岡村先生のご蔵書の整理及び本号掲載の著述目録の編集にたずさわらせていただきながら、先生の学問の時代やジャンルを問わない幅広くに触れ、改めて畏敬の念をいだくとともに、在任中はもちろん、退官後も精力的に研究論文や著書の執筆を続けられたそのパワーに敬服いたしました。先生が我々に示し、残されたものは、今後も研究室の大事な伝統として消えることはないでしょう。

さて、すでにご承知のように、研究室では二〇一二年以来、初代教授である目加田誠先生のご蔵書の整理（「目加田文庫」として福岡県大野城市に寄贈）、及び先生が中国の北平（現北京）留学中に書かれた貴重な記録である『平日記』の校注作業を、竹村・静永両先生を中心として、大野城市歴史をつなぐ事業推進室（現ふるさとにぎわい課）と協同で進めて参りました。校注作業もいよいよ佳境を迎えつつあります。振り返れば、目加田誠先生のご蔵書の整理、竹村則行先生のご退官、そして岡村繁先生のご逝去及びご蔵書の整理と、これまでの九州大学中国文学研究室を築き、盛り上げ、導いてこられた先生方について、あたかもこれまでの研究室の歴史を総括するかのような出来事に、この数年のあいだ、我々は次々と直面しております。そして予定では平成三〇年（二〇一八）——本号が第五〇号という節目を迎えるより前に、箱崎キャンパスの文学部は新たに伊都キャンパスへと移転し、九州大学中国文学研究室の箱崎における長い歴史はいったん幕を下ろすこととなります。

研究室の箱崎時代の終幕に際して、このような状況に実際に身を置いておりますと、二十一世紀を生きる科学の徒としては慎むべきことかもしれません。何か大きなもの、意思と言いましようか、『歴史の動き』とでも言うべきものを、肌で感じさせられざるを得ません。九州大学中国文学研究室は、その長い歴史のなかにおいて、いままさしく、一つの大きな転換点を迎えています。一つの時代が終わり、次なる時代へと移行しようとしています。このとき、先人の方々が築き上げてこられた伝統を受け継ぎ、そして、次の時代においても九州大学中国文学研究室の歴史と伝統を守り伝えていくためにも、我々後学ひとりひとりが研鑽を積み、努力を続けていかなければなりません。「故きを温ねて新しきを知る」の言のごとく、いまいちど、我々は先人たちの来し方を振り返り、学び、そして未来へと歩み続けなければなりません。かの陳子昂は「前に古人を見ず、後に来者を見ず」と詠じましたが、しかし我々には、前を見れば道を築いてきた偉大な「古人」が確かにおりますし、また次なる「来者」へと灯火を伝えていかなければならないのです。過去から未来へ——このことに対する新たな決意を以て、拙文を締めくくりたいと思います。

（奥野新太郎記）